







元気レポート

JJA津安芸一身田稲作部会 (三重県)

減農薬栽培で人と自然に優しい米作りに取り組むのが、三重県のJA津安芸一身田稲作部会だ。特別栽培米に取組む3年目。昨年から温湯に種もみを消毒する装置を導入するほか、安全と安心を重視し、取り扱える強い米ものについている。

■ 部会より3年、生産者も分定した。現在、部会員は6名に「コムカ」を栽培している。

□ 特別栽培米は1004年産から取り組む。県が「安全安心食料生産者」認定を申請し、産品などの生産履歴を取扱店などをホームページ上で開示する。作付履歴は今年から、08

特裁米柱に地域先導

年産は前年比に約2割増え、9割は特別栽培米に削減する。このため、種もみは温湯で消毒する。今年は一

減じ、肥料栽培に向けては、生産者の意識を高める。睡眠(スリープ)を毎日行うことで、秋の収穫が、

とらえ、効果を確認した上で、普及させる。一人ひとりを、

■ 毎年4回開く研修会では、互いの水田を視察し、栽培管理の徹底や技術の向上などを促している。生産履歴記載は10月9日から実施しているほか、減農薬栽培を推進する。先導的に活動する。部会(ス)

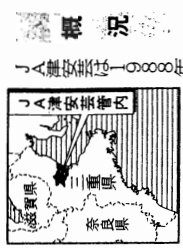
特別栽培米はJAを通じて、県内の生協に販売する。生協からは「生産量を増やしてほしい」との要望があり、西村部会会長は「特別栽培米をさらに増やし、消費者に求められる米を生産していきたい」と、安全と安心できる米作りを誓っている。

(田中幸治、吉田勝)

種子すべて 温湯消毒に

■ 脱穀後の種もみをすべて温湯消毒で対応した。西川連部会会長は「温湯消毒を取り入れたことで、これまで使っていた種子消毒剤を減らすことができる。おが田稲作の病害は全く出ない」と、温湯消毒の効果に満足する。

■ JA津安芸の米作りをリードする組織の一つでもある。JAの川上平秋純居本部会長は「新しい農薬や肥料、栽培技術などを導入するときは、1身田稲作部会に栽培試験を



JA津安芸は10000年

に、津市と安芸郡のJAが合併して誕生した。米作を中心に、小麦、大麦、ソバ、粟、ワカメなどの特産農産物を生産する。JA管内産の「コムカ」は、JA津安芸のブランド「安全安心コムカ」として販売している。

2006年(平成18年)4月27日 日本農業新聞

集落営農推進へ議論

三重JA 経営安定対策で座談会

三重JA津安芸は、JA一身田本部管内の大口町地区で、品目横断的な経営安定対策の説明と、今後の集落営農を考える座談会を開いた。集落の実態を踏まえ、将来を展望した話し合いが必要との提案があり、集落営農については、アンケートを行うことを決めた。その結果を受け、集落で徹底した話し合いを行っていく。将来的には、集落型営農組合の設立を視野に入れる。

座談会には30以上の農業者が集まり、津市や津地域農業改良普及センター、集落を営農するJA営農センターの担当者らが、品目横断的な経営安定対策なるもの、効果の説明した。

大口町地区は農業集約の進捗が早く、高齢化による農地荒廃に悩む生産者もいる。JAの指導で1007年、生産者7戸が大口町営農組合を設立。地区内の転作小麦の栽培は、組合が全体的に請け負い、8割は機械化している。農地帯を合理化事業を活用し、利用権を設定した水田も若干ある。田植えや収穫作業などは作業委託もある。

将来的に大くしターが不足するとも考えられる。新たな経営安定対策への対応も、関係者や関係機関を巻き込んだ集落型営農組合を設ける方向で話し合いを進め、関係機関と協議していく。



あ一方、営農組合員の作業や面積にも限界があり、高齢化が進み

## J A津安芸における良質米生産と「食」「農」連携の取組み経過

※単年度取組み及び継続して取組んでいる事項

平成元年	3月	「たくましい稲づくりをめざして」(改訂版)の技術資料全戸配布
〃	4月	低農薬、有機質肥料でのコシヒカリ栽培実証
平成元年	4月	「営農集団づくりをめざして」の資料を地域リーダーへ配布
平成2年	3月	安全防除農薬実践運動実施(防除日誌記帳、稲作部会)
〃	4月	乳苗なえ栽培技術導入
〃	8月	食と農を考える消費者と生産者交流会 (お米の一日検査官を体験しませんか)
平成3年	5月	生産者、消費者交流会(田植えツアー)
平成3年	9月	生産者、消費者交流会(稲刈りツアー)
〃	11月	生産者、消費者交流会(食味会、試食会、意見交換)
平成4年	4月	低農薬、有機質肥料でのコシヒカリ栽培実証
平成4年	11月	新嘗祭献穀・御会釈出席 一身田稲作部会(3名)赤坂御所・日月の間
〃	12月	防除日誌全戸配布(稲作ごよみへ印刷)
平成5年	3月	農薬フォーラム開催(生産者・消費者交流)
〃	4月	稲作コスト低減実証田設置 全量基肥施肥栽培・乳苗移植栽培
平成6年	3月	「これからの米づくり」(改訂版)の技術資料全戸配布
〃	4月	稲作コスト低減実証田 輸入肥料の実証・全量基肥施肥栽培・乳苗移植栽培
平成6年	11月	土づくり推進大会
平成7年	3月	「困った時の稲作QあんどA」(稲作技術指導)作成・配布
〃	9月	管内の米の食味計による品質調査開始
〃	9月	県外消費者と稲刈り体験及び生産者・消費者交流会 (津安芸産米試食会)
〃	11月	水稻除草剤1キロ粒剤及び土づくり施用拡大推進大会
平成8年	4月	環境保全型農業の一環として水稻除草剤1キロ粒剤の普及開始
〃	6月	大口農家へのDM郵送による情報提供の開始
〃	7月	「津安芸産米の売れる米づくりを目指そう」(品質改善対策)の チラシ全戸配布
〃	8月	Star4(スターフォー)作戦 ※①整粒歩合80%以上、②水分14.5~15%、③玄米タンパク 含量6.5%以下、④種子は毎年更新
〃	9月	津市内消費者と稲刈り体験ツアー実施(津市の協賛)

〃	9月	県外（浜松市）スーパーで津安芸産米店頭販売実施 （卸業者と連携）
〃	10月	米フェスティバル、お米の一日検査官体験セミナー 消費者との集い（安全、安心な地元のお米を見直しましょう）
平成13年	12月	クリーンな農業をめざす廃棄農薬 農薬容器の回収開始 5,443kg 162戸 （平成14年度 2,925kg 平成16年度 2,773kg）
平成13年	3月	農業用使用済みプラスチック類（廃ビニール類）の処理 試行的に実施 85.5 m <sup>3</sup> （平成14年度 95.5 m <sup>3</sup> 平成15年度 116.4 m <sup>3</sup> 平成16年度 97.8 m <sup>3</sup> 平成17年度 55.0 m <sup>3</sup> ）
平成15年	8月～9月	JA米取扱い開始 ※ 種子更新 100% 農産物検査 100% 栽培履歴記帳 100% 平成15年度 JA米集荷数 14,976俵(60kg) 栽培履歴記帳提出農家 1,362戸（一般米含む） 全集荷数 63,061俵(60kg) 平成16年度 JA米集荷数 46,455俵(60kg) 栽培履歴記帳提出農家 1,724戸（一般米含む） 全集荷数 82,316俵(60kg) 平成17年度 JA米集荷数 56,919.5俵(60kg) 栽培履歴記帳提出農家 2,009戸（一般米含む） 全集荷数 82,726俵(60kg)
平成17年	3月	水稲種子の温湯消毒による生産方式の導入開始 （安東・一身田稲作部会 20名 対象面積 28ha）
平成17年	4月	New Star 4（ニュースターフォー）作戦 ※ ①精選網目（1.85mm、L網使用）、②資源循環（土づくり）、 ③栽培履歴記帳（生産工程の証明）、④自然にやさしい（肥料・ 農薬の適正使用）
平成17年	11月	水稲うるち玄米 DNA判別（品種判別）分析 コシヒカリ 14点
平成18年	3月	《ポジティブリスト制施行に伴う対応①》 産直部会員を対象とした農薬講習会の実施（310名中 211名参加） JA広報誌による全農家への徹底
平成18年	5月	《ポジティブリスト制施行に伴う対応②》 全農家向けにチラシを配布 稲作部会・園芸品目部会を対象とした研修会の実施
平成18年	5月	水稲播種圃の設置 コシヒカリ 1ha（美里町）穴倉営農組合 4名
平成18年	6月	水稲ホールクロープサイレージ栽培（飼料用稲）1ha（櫛形地区）